

視察研修報告書

【委員会名】 厚生文教常任委員会

1. 日程 令和7月1月23日(木) 午前9時30分～11時30分

2. 視察先及び視察事項

徳島県勝浦郡上勝町

研修会場 月ヶ谷温泉 月の宿1階ムーン

現地研修 上勝町ゼロ・ウェイストセンター ゴミステーション

3. 参加者 7名

委員長 山下 慎二 副委員長 大山 希世

委員 藤本 憲一 東芝 弘明 滝ノ上 万記

議長 松岡 宏行

町当局事務局 井上 隆由(環境課課長補佐)

事務局 女良畑 政幸(議会事務局参事兼事務局長)



花本町長からの歓迎のあいさつ

4. 視察対応者

上勝町長 花本 清

合同会社パンゲア 野々山 聡 他1名



研修を受ける厚生文教常任委員、議長と事務局職員

5. 視察先の概要

徳島県のほぼ中央に位置する人口約1300人、高齢化が50%を超える四国で一番小さな町、上勝町。視察では、この町を一躍有名にした「葉っぱビジネス(彩事業)」や日本で初めてゼロ・ウェイスト宣言をした取り組み等、地域を盛り上げるさまざまな取り組みをしている。今回はゴミ問題についての視察研修を行った。

6.視察の内容

《上勝町ゼロ・ウェイスト宣言》

2003 年のゼロ・ウェイスト宣言から 17 年、上勝町では町民一人一人がごみ削減に努めリサイクル率 80%以上を達成しました。

小さな町の大きな挑戦は世界から注目され、持続可能な社会への道筋を示しました。私たちが目指すのは、豊かな自然とともに、誰もが幸せを感じながら、それぞれの夢を叶えられる町です。上勝町はゼロ・ウェイストの先駆者として、「未来のこどもたちの暮らす環境を自分の事として考え、行動できる人づくり」を 2030 年までの重点目標に掲げ、再びゼロ・ウェイストを宣言します。



○研修会場 月ヶ谷温泉 月の宿1階ムーン

合同会社パンゲアの野々山聡氏からプロジェクターを活用した資料に基づき上勝町のごみ行政の取り組みや経緯について説明を受ける。また、事前質問について回答をもらう。

○現地研修 上勝町ゼロ・ウェイストセンター ゴミステーションを視察

研修会場からマイクロバスで移動し、ゴミステーションで現地研修を受ける。この日も、住民が実際にごみの分別にステーションに来られていた。



上勝町ゴミステーションのゼロ・ウェイストセンター

《質問事項》(回答)は、合同会社パンゲアの野々山聡氏から

- ① 2003 年からのゼロウィスト宣言で、2020 年までの実績の推移や効果は。宣言をした時の住民の反応は。また、議会での議論は。これに基づく条例の背景、制度についても知りたい。

(回答) 2020 年までのリサイクル率の数値は、81.1%だった。宣言のスタート時は、住民の6割の方に理解を得ていたように思う。議会での議論は、満場一致で賛成された。

- ② 取り組みには、住民の理解と協力が不可欠。スタート時に住民にどのような説明をしたのか。また、その時の苦労話などあればお願いしたい。

(回答) 集落ごとに説明会を実施。期間は1カ月半。住民の本音は、本当はめんどくさいことだが、上勝町の第2のブランドになるなら、やってみようということだったと思う。

- ③ 自治体の収集運搬業務は法律で定められていると思うが、収集しない方法をどうクリアしたのか。

(回答) 自治体の収集運搬業務は努力義務だと思う。



- ④ 2か月に一度の高齢者などによる収集されたごみの内容は、どのようなものなのか。また、2か月自宅にごみを保管することとなるが、そのことについて苦情はないのか。

(回答) 役場の職員が軽トラで回収にまわる。アンケートの結果、2カ月に一度

- ⑤ 何人ぐらいの町民が、ごみを持ち込んでいるのか。ゴミステーションまで、一番遠い人でどのぐらいの距離があるのか。また、持ち込み困難な高齢者以外の若い人で、車を所有していない人の対応はどうなるのか。ごみの持ち込みについて、住民同士の協力や助け合い活動はあるのか。

(回答) 1日 20ぐらいが持ち込んでいる。一番遠い人で約 25 分程度。車を所有していない家庭は41軒で、9割以上がひとり世帯です。

- ⑥ 生ごみの処理の方法はどうなっているのか。分類の「どうしても燃やさなければならぬもの」はどこでどのように処理しているのか。また、不用品は町外の人でも持ち帰ることが出来るが、その後の調査や処分について管理しているのかどうか。

(回答) 生ごみの処理はコンポスト、移住者の人は電動生ごみ処理機を使用。不用品は、くるくるショップで持ち帰ることができるが、後の調査はしていないが、

重さで管理している。

- ⑦ お店のごみは、どう処理されているのか。また、店の数はいくつあるのか。

(回答) 飲食店、カフェなど4店舗で、それぞれコンポストを使用。また、めばえ組合の会員になると大きな生ごみ処理機が利用できる。



- ⑧ ポイント制度の発想はどのようなことからだったのか。

(回答) 上勝町の中学生からの提案。

不用品を持ち帰ることができる
「くるくるショップ」を見学

- ⑨ 推進協議会にゼロウェイストアカデミーという人が入ってるが、どのような人なのか。

(回答) 現在は入っていない。

7. 考察(各委員の所感等)

【山下委員長】

○研修を受けての所感

人口約1,300人の町で、2003年に「ゼロ・ウェイスト宣言」を日本で初めて行っている。宣言以前は野焼という方法でゴミ処理をしていたが、焼却炉の使用などもあったが、住民の方が自らゴミを運び、43種類にも及ぶ分別をするという選択をされた事に熱意と強い思いを感じた。この事業を徹底的に実行され、探求心を持って20年以上という長い年月をかけて作り上げた事がわかった。リサイクル率が81.1%と脅威的な数字にもかかわらず、何故19%がリサイクル出来ないかを考える事についても驚かされた。

○本町に照らした所見

本町は、ダイオキシン問題が起こった際に、プラスチックの分別を行っている。収集と運搬を普通に行っており、1市3町の広域でゴミ処理をしている。上勝町のように住民が一つの施設へゴミを持って行ったり、分別を行うことは難しいと思うが、中間管理施設を持っているので、住民がより細かく分別を理解し、意識を高め、今まで以上に細かく分別をする事が出来れば、施設でも楽に分別ができるのではないと思う。住民負担になるゴミ処理方法を進めていくためにも、説得のある説明が重要であると感じた。今までのままでは良い訳でもなく、ゴミ処理費用を減らす事、リデュース、リユース、リサイクルの必要性を住民に訴えていく必要がある。

【大山副委員長】

○研修を受けての所感

20数年前までゴミはすべて「野焼き」していたことにまず驚いた。日本で最初にゼロ・ウェイストに取り組んだ町の話とは思えなかった。大きな穴を掘りどんなゴミでもいっしょくたで24時間燃やし続けていたという。作業していた職員さんや近隣住民は有害物質を大量に浴びていたと思うと恐ろしい。しかし様々な不運が？転じて世界に知られる活動として知られていることは素晴らしい。約20年の継続活動の積み重ねが共感評価された。一部上場企業がスポンサーになって新規事業が発展していることにも感動した。

また、ゴミステーションに何うと古紙の束を縛る紐さえも紙で出来ている徹底ぶり。細かく分別することに重い暗い雰囲気は全くなく、むしろ遊び心が随所に見られたことも魅力のひとつだった。例えば不要になった窓枠を使いくるくるショップの窓や壁に使う。いろんな色のガラス瓶を使った照明器具など見るにも楽しくそれには意味があることを感じた。

○本町に照らした所見

可燃ごみ、特に生ごみを焼却する量を減らすことを目標にできれば良いと思う。焼却するためのコストが多くかかれば、住民には税金として負担が増える仕組みを、まずは知って頂けるように取り組みたい。どれくらいの人があるのか？を理解しているのか？生ごみ焼却コストを減らすためにどんな選択肢があるのか？を研究することは大切。例えば、コンポストではなく生ごみを堆肥化する処理機の補助金も選択肢のひとつかと感じる。あるいは自治区単位に一台の堆肥化処理機を置き、住民が自由に使い、堆肥は無料で畑に使えると、すごくサステナブル。

生ごみを減らすことが定着していけば、次はプラごみについて徹底的に研究し新たな取り組みを実施すれば良いのでは。

【藤本委員】

○研修を受けての所感

今回、ゴミゼロ運動や町民が自ら処分場へゴミを持ち込み45種類に分別する、徳島県上勝町を視察した。視察前から町民の理解と協力が必要な施策である事を、どの様な町民説明を行ったのかが、一番聞きたい事であった。説明では、事業のスタート1か月半前から集中して説明会を実施したとの事、そんな短期間で町民の理解が得られたとは不思議であった。説明を聞き以前に林業から「葉っぱビジネス」に変わって

からは、町民のふる里への意識に変化があった。「葉っぱビジネス」を第一ブランドと命名し、「ゴミゼロ運動」を第二ブランドとして、町民に理解を求めたとの説明であった。

町民の郷土に対する誇りをうまく利用した形となった事が一番印象に残った。

○本町に照らした所見

今回の視察研修は、宿泊地が指定されている視察で、全国から「ゴミゼロ運動」を視察に来るが、すべて宿泊地が指定されていた。本町も、最近視察が増えている現状を上手く利用できないのか、特に花園をアピールするチャンスだと思う。「ちりつもポイント」は、民間でやっている「紙の杜」を行政がやっている地域通貨である。ゴミ分別に対するお返しという事で、地元の中学生の発案だそうです。本町も検討する価値はあると思う。

【東芝委員】

○研修を受けての所感

行政視察研修を町から委託されたパンゲアという合同会社が、視察に対応してくれたのは驚きだった。研修場所は宿泊した月の宿という旅館の一室で、有料の研修だったが、宿泊すれば研修費が1人当たり500円減額されるという仕組みだった。視察の受け入れが一つのビジネスになっており、地域おこしにつながっていたのは、面白かった。視察に先立って町長の花本靖氏が挨拶された。町長の話は、上勝町がゴミのゼロウェイスト宣言をしたことによって、国際的にも有名になり、日本国内の企業からも注目を受けているというものだった。

2003年9月にゼロウェイスト宣言を行った上勝町は、2020年までにゴミのゼロウェイストを達成するとしていた。しかし、徹底した分別を行っても分別・リサイクルは81%に留まったのだという。この到達点をふまえた上勝町は、新たに2030年までにゴミのゼロウェイストを達成することを掲げ、ここから先は日本や日本社会、企業に働きかけ、商品生産の在り方を変えないとゼロウェイストは実現しないという認識に到達した。この視点と観点は素晴らしい。取り組みの実践を通じて得た認識は「ほんまもん」だった。

町長は、この新しい目標の下で企業との連携を図り、ビール会社や三菱地所（かな？）と協定、連携を結んでいることを語り、東京でゴミゼロのビール工場や会社が生まれていることを語った。上勝町という山の中の自治体で、町長が語ったのは東京の企業の話だった。一つの事業を徹底的に探究すれば、新しいものがそこから多面的に生まれてくる。ゴミの取り組みが自治体を有名にし、現実に変える力になっていた。

旅館での座学の後、上勝町ゼロウェイストセンターに行って分別の仕組みを学んだ。建物自体が、リサイクルされた窓やドアが使われており、上勝町の努力が形になっていた。

混ぜればゴミ、分ければ資源であり、資源化すれば販売もできるというのは、かつらぎ町自身が体験してきたことだった。上勝町のセンターでは、分別した資源がいくらで販売されているのか、キロ当たりいくらという金額で表示されていた。

「ゴミは究極のプライバシーなので、住民がゴミを投入しているところは、写真を撮らないでください」ということだった。ゼロウェイストセンターには、何でも持っていき捨てたいという施設もあり、不要品だった物が新しく引き取ってくれる人の家庭で命を吹き返すというのは、面白かった。

上勝町の人口は、かつらぎ町の 10 分の 1 以下だった。この人口規模でゼロウェイストセンターにゴミを持ち込んでくる人は、1 日 20 人程度だった。わが町に置き換えると 200 人という規模になるので、全てのゴミを持ち込むという方法を採用できないのは明らかだと思われる。収集と運搬はかつらぎ町独自の事務として、なくすことはできないが、その違いをふまえた上で、上勝町から学ぶことは多い。

○本町に照らした所見

上勝町から哲学的に学ぶ必要があるのは、何のために、何を目的にゴミの分別・リサイクルを行うのかという姿勢だろう。ゴミのゼロウェイスト宣言を行った精神の深さは半端なものではない。上勝町は、本気でゴミという無駄を全てなくすという観点を貫いている。上勝町の場合は、ゴミをどう処理するのかではなくて、ゴミそのものをどうすればなくすことができるのかということだ。ここがわが町と全く違う。奈良県の斑鳩町も近隣ではゴミのゼロウェイスト宣言を行っている。ここにもぜひ視察に行くべきだと思っている。いったいゼロウェイスト宣言とは何なのかを、まずはつかむ努力が求められる。

その上に立って、上勝町の取り組みをかつらぎ町に生かすためには、同町が行っている分別とわが町の分別の比較表を議員が汗をかくて作成し、わがかつらぎ町で、さらなる分別ができるかどうかを見極める作業が必要だと思われる。この作業の中では、生ゴミを焼却処理しないことを、わが町で具体化できるかどうかとか、天ぷら油などをどうするのかとか、個別のゴミの分別サイクルの見直しが問われる。個別の問題を新たに提起するだけでもハードルは高い。

具体的に分別・リサイクルを進化させるためには、収集と運搬という自治体独自の固有の事務を捉え直すことが必要になる。幸い、わが町には中間処理場がある。この施設をもっと有効活用すれば、さらなる分別とリサイクルは進められる。広域のゴミ処理を

理由にして、分別を躊躇する必要はない。かつらぎ町の徹底した取り組みをもって広域の事務を変化させるという、広域化するときにかつらぎ町が立脚していた原点に立ち返ることが大事だろう。

議員が、ゴミの分別問題でイニシアチブを握りたいのであれば、自分たちで資料を作り、分析を重ね、政策提言につなげる必要がある。そのためにも上勝町の事例をしゃぶりつくし学び尽くす必要がある。委員会では、委員長のイニシアチブにも期待したい。委員会で変化を起こすためには、委員長の具体的提案が必要である。

【滝ノ上委員】

○研修を受けての所感

今回の視察先である徳島県上勝町は、所謂「葉っぱビジネス（事業名：彩事業）」で全国的にも有名な町である。その上勝町が「第2のブランド」事業として、2003年に日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言（事業）」を行なった。「ウェイスト」とは日本語で「無駄、消費」という意味であり、文字通り、廃棄物やゴミの削減を目的とし、併せて資源循環も推進している。具体的にはゴミを35分別するところから始まり、現在では43分別の仕分けがなされている。

上勝町では1975年頃からごみ処理は「野焼き」で行なわれていたとのことであるが、法律が厳しくなったことや環境問題への関心の高まりにより、野焼きをすることが困難となってきた。一方で、町の人口規模が小さいため、ごみ処理に多額の予算を掛けることも困難であった。そこで上勝町は1994年、ごみを減らすための「リサイクルタウン計画」を策定した。また全国的に容器包装リサイクル法が施行された1997年に、上勝町はゴミステーションを開設し、缶、ビン、ペットボトルなど9分別の資源回収を開始した。このことが現在の「ゴミ・ウェイスト宣言」に繋がっていくのである。

成果と課題

全国初のゼロ・ウェイスト宣言から20年が経過し、以前はゴミを野焼きしていた上勝町が、今や全国有数のリサイクル率を誇る街へと生まれ変わった。また他の自治体においても上勝町にならいリサイクル率の向上を目指す自治体も増加してきている。しかしながら、リサイクルすることができない残り約20%の廃棄物、ゴミ処理を今後どうするのかという課題が残されている。そのため、現在では、2020年に「第二期ゼロ・ウェイストタウン計画」を策定し、「1人あたりの年間廃棄物の総量を2035年までに15%削減する」目標に向けて取り組んでいる。

○本町に照らした所見

短期的な視点で見ると、本町では現状、一部事務組合により他市町と共にごみ政策に取り組んでいる点が今回の上勝町とは大きく異なる点である。それはすなわち、本町でリサイクル率を向上させることが出来たとしても、ごみ処理施設のランニングコストの負担は他市町と足並みをそろえる必要があるということである。よって従来とは大きく変えることが出来ないという問題があると思われる。

また、本町と上勝町の人口を比較すると、約10倍の差があり、上勝町で行われている施策、特にごみを町民にステーションまで持ち込んでもらう、ということの実現が極めて困難であると感じる。上勝町のように、例えば「ゴミを野焼きしていた」というような現状があり、それに対する町民の危機感等が有れば何らかの大胆な施策も可能になると思うが、それが無い現状において、また益々高齢化が進む未来において、上勝町のように免許証のない高齢者宅へ2か月に1度とは言えボランティアがごみ収集に行くということについてハードルが高いのではないかと。

とは言え、上勝町のような家具や衣服などの不用品を持ち込むステーションのような場所を本町でも設置してリサイクル率をアップさせるというような施策は短期間で実施可能であると思われる。そういう可能な事からスタートし、町民のゴミのリサイクル率アップに関する関心を高め、長期的にゴミの削減やリサイクル率の向上に努めることは決して困難なことではない。



研修の最後に、今回説明していただいた合同会社パンゲア 野々山 聡氏とゴミステーション前で記念撮影